

アルパック ニュースレター



「アミンガ潮江イースト(JR尼崎駅北第一地区第一種市街地再開発事業)」が竣工しました
(本文中に関連記事があります)

アルパック ニュースレター もくじ

1994年5月1日

- 巨星・天下を照らす 2
- 「住んでいて気持ちがいい」高齢者住宅をめざして 3
- まちづくりの合意形成・現場からの報告 4
- “みんなが集まる楽しい公園”をつくろう 6
- 『わんぱく設計家・遊び場ワークショップ』体験記 10
- '94新人紹介 11
- 話題沸騰！“いまサッカーが熱い” 12
- うまいもの通信④ 13
- リリアンさんの逝去を悼む 14
- 新刊旧刊書評紹介 15
- まちかど 16

No. **65**

巨星・天下を照らす

— 西山卯三先生を偲ぶ —

三輪 泰司

4月2日午前2時7分、京都大学名誉教授西山卯三先生が、お亡くなりになりました。

4月3日の通夜と4日午後の葬儀・告別式には、各界のご弔問、1,000名を越えました。

告別式後、京大会館で「偲ぶ会」を設けました。東京・九州からもお越しの大学・研究関係の方、56名がご参集下さいました。

葬儀委員長・巽和夫京大名誉教授の弔辞にもありましたように、先生の研究活動領域の拡がりや、庶民住宅研究から、都市・地域計画におよび、各時代・各方面の思い出は、とても短い時間では、語り尽くせません。

アルパックにとっても、語り尽くせないものがあります。

城崎の町と建築

最近の先生の活動の焦点は、京都の都市づくり・高層ビル化批判に集約されていました。

当の私自身は、JR京都駅改築の国際的コンペのアドバイザーという、先生とは真向から対立する“事業者側”の立場にありました。

そのような中で、一昨1992年10月のことです。永く兵庫県城崎町の町づくりや外湯の建築デザインに、足を運んでいながら、この町の「だんじり祭」を経験したことがない、是非見たいとおっしゃって、当日の15日マイカーで出石を回り、ご案内しました。祭の後、ゼミ旅行以来、久しぶりで、それが最後になったのですが、「古まん旅館」にご一緒に泊まりました。30数年前、大学院生達が手伝って設計した「ゆとう旅館」の“あずまや”の前で“もう此処へ来れるのも最後だろうかから写真をとってくれ”とおっしゃって、先生のカメラに収めました。

伝統的な香りに、ほのぼのした味を加え、先生も特にお気に入りの、まさに珠玉のような作品です。

学研都市のスタート

アルパックは、創業間もない1968年から、3年間、総理府内閣審議室の「21世紀の設計」で、西山先生を代表とする関西グループの受託機関をつとめました。これは国土の将来ビジョンづくりに即して、先生の“構想計画”の方法を実行した経験でした。関西文化学術研究都市の構想は、その展開でもあります。

1977年、学研都市構想の始まりに、“奥田東先生をお助け下さい”と言われたのは、当時京都府の総合計画審議会南山城地域整備部会長であった西山先生でした。1978年、審議会会長として林田知事への答申書「南山城地域整備構想 4.学術研究都市」に“京阪奈丘陵地域を単なるベットタウンとすることなく、文化の香り高い豊かな人間居住の場としてのまちづくりを指向し、大都市機能の回復に寄与するとともに、ひいては我が国における学術、研究の新しい拠点ともなる地域として整備し、発展させようとするものである”と明示されました。これが行政の文書に記された最初で、これを受けて近畿圏基本計画の見直し、そして学研都市基本方針へとナショナルプロジェクトの基礎になりました。この都市づくりの理念は今日でも活きているし、活かすべきだと思います。

巨星は墜ちず、日本人と、人類の良心、永遠に、あまねく天下を照らし続ける太陽のように暖かく、大きな星・西山卯三先生です。

(代表取締役会長 みわ ひろし)

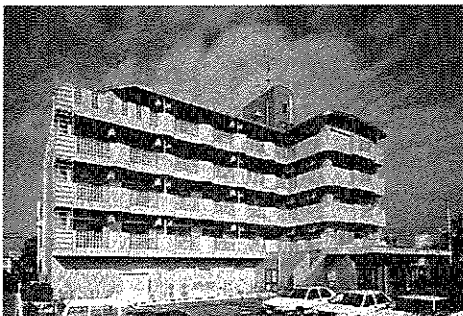
「住んでいて気持ちがいい」高齢者住宅をめざして

— 住み手の声を反映し、シルバーピア“小川西”が竣工 —

小林 佑造

今回の建物は、東京事務所としてアルパックの基本理念である現地主義・総合主義・実証主義の実践第一号です。

東京事務所が最初に高齢者に取り組んだのは、東京事務所設立の翌年、平成元年小平市高齢者住宅計画からです。今では東京都内全ての区市で、高齢者住宅計画と地域福祉計画（ゴールドプラン）は策定されていますが、当初は都内での事例も少なく発注する市でも何をしてもらえば良いのかもわからず、アルパックが書いた企画書を読んで内容が把握できたような状態でした。高齢者の住まい方などについては、アンケートなどにより大まかなことは把握できても、委員会の先生を含め高齢者に対しての実態が良くわかっていなかったこともあり、最初の仕事は委員長であった日本女子大の高橋公子研究室の院生と、何はともあれ高齢者の生活を肌で感じることから始めました。高齢者の自宅を訪問し、引き出しや押入の中の持ち物まで調べさせてもらう住み方調査と平行し、生活実態の細部にわたるヒアリングをさせてもらい、高齢者からは「若い人と話ができる」とのことで、祖父母が孫に話を聴かせる調子で長時間色々な話を聴かせてもらったものです。



民間借り上げたシルバーピア住宅（小平市）

院生の感想の中に「実際に一緒に住んでいるのに、自分の祖父母ともこんなに色々な話をしたことがなく、考え方が若いには少々驚いた。もう少し家でも話をしてみます。」

との話や、実測等を手伝ってもらった学生は、ゼミの「一人住まいの部屋の使い方」との課題に対して今回の調査が影響したのか、かなりリアリティあるものが出てきたと高橋教授が笑いながら話しておられました。

そんな中から、市が借り受ける住宅として、この建物は計画が始まりました。ここに入居している方達は、今まで多くのことを経験し、また、個々人が歴史をもっています。その人達が施設ではない高齢者だけの住宅の中に集合し、住まうことについてはどうなのか、そこらの感覚だけでは捉えきれないことについて、都内に建設されているシルバーピア居住者の方達に住み方や居住者間の付き合い状況などをあれこれ聴かせてもらいました。そして、設計のテーマを「住んでいて気持ちがいい」におきました。高齢者の方々から教えてもらった直接的な改良点やソフトな問題点を建物の中に具体的な形にして各種の仕掛として盛り込んでいきました。

外壁のベランダ手摺は穴空きのブロックを使っていますが、これは布団を干す時に風通しも良く、布団がふっくらと干し上がります。また、持ち上げられる高さはせいぜい 1.3m が限度であり、取り入れる時は力が入らないようにとのことから、コの字型に物干し竿をコロ代わりにできるような仕掛をしたりしています。

ここでの照明器具の常識は、天井に取り付

ける場合でも、壁際に取り付けるというように、非常識なことから始まりました。そのため、最初の段階では現場監督をはじめ、設備施工者が集まり、ワイワイガヤガヤと現場事務所が高齢者研究室となるほど賑やかになったものです。

バルコニーは縁側の付き合いが可能なように南面廊下との考えで各戸との隔壁は設けていないものの、現段階ではバルコニーからの

訪問はなく、プライバシーは保たれているようです。

このように、高齢者の方々に教えていただいたソフトな各問題に対し、設計者と使う高齢者を通じて一つの回答が出せたらと思っており、今後追跡調査をしながら、これからの課題である「バリアフリー」について多少なりとも回答が出せたらと思っています。

(東京事務所 こばやし ゆうぞう)

まちづくりの合意形成・現場からの報告

— JR尼崎駅北第一地区第一種市街地再開発事業の竣工に当たって—
馬場 正哲

この3月19日JR尼崎駅北(潮江地区)再開発の先駆けの地区である、住宅・都市整備公団施行第一地区第一種市街地再開発事業(地区面積約2ha、総権利者168人)の竣工式が行われました。

潮江地区は昔港で栄えた神崎の里の近郊で、明治期から工場の導入や鉄道の敷設など近代化に真摯に取り組んだ小田村の中心です。駅前にはキリン麦酒工場が占め、その北に商店街が形成され北部住宅地のサービス中心ですが、木造老朽住宅が密集地しています。尼崎の東玄関を目指し、駅北約9haで再開発が進められています。この広範な再開発計画での、地元合意の経緯を振り返ってみたいと思います。
地元推薦のコンサルタントとして

昭和55年に市が基本計画を策定し、同時に行政主導で「まちづくり協議会」を設置し、地元との再開発の協議が進められていました。その中昭和59年、人口減少地域での商業計画に不安を抱く地元業者等の要望で「商業勉強会」が設けられました。アルパックは、地元が選んだアドバイザーの立命館大学遠藤晃教授の推薦で、この関連の商業調査の委託業務から事業に係りました。

最初の顔合わせは「地元推薦とはいえ、事業推進の客観的な立場で、誠意を持って協力する」と言う確認からスタートしました。この立場は地元との信頼関係の原点であったと確信しています。しかし、地元推薦は市からは警戒される関係も引きずります。

地元の反対と計画の見直し

ご承知のように、再開発事業は地区内の地権者等が共同し、同じ地区内で一つの建物に建て替えて、居住あるいは営業をつづけていく事業です。従って、地元の様々な面での合意づくりが事業の重要なポイントです。

地元には自治会連合的な「社会福祉協議会」や「潮江本町商店街振興組合」などがあり、この代表と地区内の再開発での立場別の代表が「まちづくり協議会」に選ばれています。この外に、「潮江再開発を考える会」などの組織があり、独自の活動をしていました。潮江地区は住民活動が相対的に活発です。この背景には、地区の「借地借家人組合」の活動や女性市民運動などが人材や組織活動のノウハウとして生きているように思われます。

そんな中昭和60年、都市計画決定に向けた権利変換モデルの発表が行われたのを契機に

再開発事業への反対運動が起きました。「モデル価格では、経済負担が大き（お金の問題）」「市が一方向的に計画を立てたものであるとの印象が強い」「商店街を分割して整備することは、工事期間中の営業低下が免れない」などが理由でした。そして、市との交渉により、計画の根本的見直しを前提に地元が再度協議の場につくこととなりました。

住民の計画づくりへの参加

まちづくりを進めて行くためには、計画案を①自分達がつくりあげたものにする（必要性の認識）、そのため②自分達が何をしなければならないか（行動の具体化）、そして③どういう支援や方法が最大限なされるのか（不安の解消）などをつくりあげることが大切であるとの考えから、住民参加の計画づくりを踏まえ、潮江地区のまちづくり上の問題発見から検討協議し、全体計画を見直していくこととなりました。

このため、以下の新しい検討組織を設置し、見直しに着手しました。

- ①「まちづくり計画研究会」とし、「まちづくり協議会」の下に位置づける。
- ②構成は「協議会」のメンバーを中心に各立場を代表し、計画案の見直しに積極的に参加活動できる委員を選出し、まとめ役の「座長」を設置する。また、運営の機動性を高めるため「運営委員会」を設ける。
- ③助言者を置く。助言者は「商業勉強会」ア

ドバイザーの遠藤晃先生にお願いする。

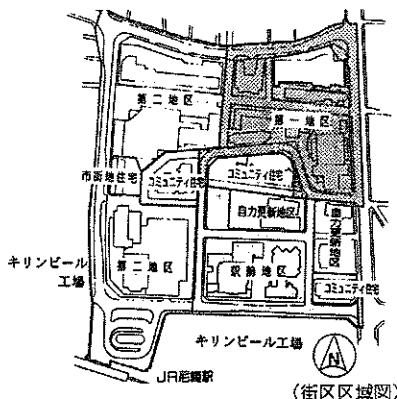
- ④市及び市が事業施行者として予定する住宅・都市整備公団が計画づくりに参画する。
- ⑤見直しの専門的な検討業務と調整（コーディネート）を市と委託契約を締結するコンサルタント（アルパック）があたる。
- ⑥住民参加の実行を高めるため、検討協議した内容を記録し、課題の対応策の練り上げとその経過を「まちづくり協議会」に報告し、「まちづくり計画」案を提案する。

合意の原点は率直な疑問への正直な対応

この組織で地区の問題発見から課題の対応や将来像の基本的な考え方をまちづくりの「マスタープラン」としてまとめ、「全体説明会」を踏まえて、昭和61年7月機関決定にいたしました。

「マスタープラン」段階の合意のポイントは、地域全体の活性化など、まちづくりの課題を再開発事業で解決することと、残される課題の対応を整理するとともに、再開発事業に対する不安点、とくに「お金の問題」などの現時点で解決し得ないものについて整理し、対応策（何時誰がどう対応するか）を明記することで合意の基盤をつくったと言えます。

この総論である「マスタープラン」の合意を踏まえて、まちづくりの事業化を前提とした「基本計画」の検討に入り、全体基本計画と第一期の都市計画案をとりまとめ、「全体説明会」を経て、昭和62年に機関決定にいた



オープニング・セレモニー

りました。

この全体説明の段階で、地元との再開発事業の具体面の交渉を持ち、懸案の「お金の問題」等について先の権利変換モデルの対案提示とともに、残される課題の対応を明記して、都市計画の概ねの合意を整えていきました。

協議システムが生き続ける

再開発事業の都市計画決定以降は「まちづくり協議会」の下に、各地区（3地区）ごとの検討協議機関を設置することとし、潮江地区全体に関わる問題や最終決定事項を、必要な事項は「まちづくり計画研究会」での検討を踏まえ、「まちづくり協議会」で承認という流れが定着しました。この採配は「協議会」の正副会長会で行いました。また、各地区協議会にはこの正副会長が委員として入る体制とし、全体の調整に配慮しました。懸案の零細権利者対応などを専門的に検討する「権利者対策委員会」も設置されています。

第一地区では「第一地区促進協議会」が設置され、その下に「施設計画部会」「住宅部会」「評価補償部会」を設け具体的な協議に入りました。施行者として承認された住宅・都市整備公団を中心に、地元対応を市が行い、「事業計画決定」「権利変換計画決定」に向け、事業推進が図られていきました。

結局は善良な人たちの善意の結晶

再開発は地区の人を全員引き込む事業で、全ての納得でことを進めるのは困難です。特に事業が具体の段階となると、理屈抜きの妥協づくの段階となります。従って、前向きの議論が継続する条件が大切です。

そのためには都市計画決定前に、事業が必要な客観的な論理と行政の確たる方針を理解してもらうこと、同時に再開発事業だけでなく多面で総合的な施策を合わせることで、市民意向に柔軟な計画づくりなどが必要です。

終わりのないまちの経営

いま、市民意向を反映した都市計画マスタープランが都市計画法で義務づけられています。住民のまちづくりへの意識と知識は大きく進歩してきています。日常的なまちづくりの市民の活動、参加のシステムを構築していくことが必要です。潮江地区の経験はそんな知恵のさきがけとして活かしたいと思います。

潮江地区のまちづくりはようやく第一歩が完成したところです。計画の完結と新たな活性化の取り組みが必要です。「どんなまちにしよう」という具体のイメージを共有し、まちの日常的な営みや人と文化のみえるまちづくりの活動が息づくことを念願しています。

（大阪事務所 ばば まさあき）

“みんなが集まる楽しい公園”をつくろう

— 問われ出したそのあり方 —

重本 幸彦

ついに公園が迷惑施設に

数年ほど前のことだが、ある人を經由して、土地区画整理事業に関して相談にのって欲しいという依頼があった。よくあるように、減歩率（区画整理事業を通じて行われる地主の保有土地面積の減少率）ぐらidemもめているのだらうと、二つ返事で引き受け、その道の

ベテランとともに現地へ出向いた。

ところが、とある農家らしいお宅の大広間に通され、おばさんたちをはじめ集まった人々の口から出てきたのは、「今の区画整理事業では、自分たちの家のすぐ前に公園ができる。これに反対したい。どうすればよいか」ということだった。何んと全く予想外の問題では

ないか、内心大いに面くらった。

アナウンスや子供たちの声のざわめき、あるいはイメージなどから、学校や福祉施設などがしばしば迷惑施設的になっている例は聞いていたが、公園が迷惑（嫌悪）施設というのは初めてだった。

地元のみなさんが口々にいうのには、「公園ができると、盗難自転車やごみの捨て場になる。不良のたまり場になる」「こんな公園はコワイし迷惑だ」という訳である。なるほど、その心配は分からないでもない。しかも、その少し前に、近くの都市の公園で、喫煙中の少年グループに注意をした青少年指導員が相手ともみ合いになり転倒して死亡するという事件があった後だけに、人々は真顔だった。

ともかく、その場は、「（行政などと）よく話合って、“明るく楽しい公園”にするよう計画したらどうですか」といって、汗をふきふき引き揚げてきた。

今までは公園といえば一応はもてはやされてきたが、ついにここまできたのかといういささかのショックとともに、公園などのコミュニティ施設は計画段階から住民参加が必要だということを改めて痛感させられた。

問われる公園のあり方

ここに紹介した話はやや特別な例かもしれないが、氷山の一角といえなくもない。

日光浴を兼ねて幼児を遊ばせる児童遊園（ちびっ子広場などと呼ばれ、制度的には都市公園とは区別されている）への要望は強く、借地方式での整備を含め各地でかなり普及しているようだ。しかし、一般に公園といえば、お母さんなどにつき添われた幼児以外には、放課後などにやって来る小学生、夕方頃からたむろする中高生（このグループがいわゆる「不良」視される）。ゲートボール場などがあれば高齢者が集うというのが通例で、そし

て休日には家族連れが加わるという程度であろう。

公園は市街地での緩衝緑地・災害時の避難地などとしての意義はあるが、それほど人々が集う場にはなっていないことが多い。つまり、一般的には「あればよい」という程度ではないだろうか。樹木が繁りすぎて暗い用心の悪そうな公園は、遠くから眺めるにはよいが、中には入りにくいというのが実情であろう。

もちろん、公園は時々使う施設でもよいということかもしれないが、放っておくと、冒頭のように迷惑施設化してしまう可能性があるというのがツライところであろう。

人々が集まれば良い公園に成長

もちろん、あちこちの公園を見て歩くと、子供たちからお年寄りまでいろんな人々が利用している公園も結構ある。

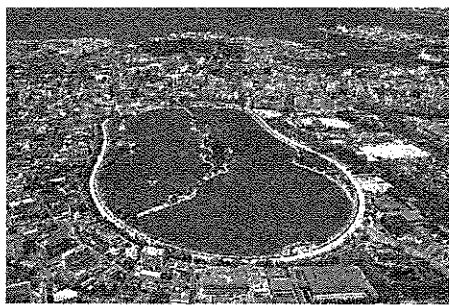
例えば、大きな公園の例では、中之島公園（大阪市）がある。ここでは、旧淀川を軸に公園内外に市役所・公会堂・図書館・陶磁器美術館・バラ園・テニスコート・ボート遊び・遊覧船・水辺の軽食堂などが集積し、人々は思い思いの過ごし方をしている。この“思い思いの過ごし方”ができる条件づくりがとても大切だと思う。

同様の例としては、上野公園（東京都）・円山公園（京都市）・大濠公園（福岡市）などが挙げられる。これらの公園には有名なお寺や池などがあり、人々を集める仕組みができてきている。その他、中小の公園でも、公園内やそれに接して人々を集める機能がある公園は、当然ながら人々でにぎわっている。

我々の名古屋事務所での調査（『中川運河地区快適環境づくり』昭和61年3月、名古屋市）によると、アンケートの結果、住民からアメニティ性が高いと評価されている所とし



大濠公園 美術館、体育館などの文化施設が配置されている



大濠公園 (出典 パンフレット)

て、“住宅団地に隣接した公園”“(多種類の施設がある)多機能型大規模公園”“社寺などの集積した公園”“水辺のある空間(港などを含む)”などが挙げられている。

以上から分るように、公園内外に様々な集客機能がある公園には、多くの人々が集まり、多くの人々が集まる公園には、放置自転車の残骸などはほとんど見られないし、いわゆる不良のたまり場的な雰囲気も少ない。訪れる人が多いと、その声が世論となって公園の管理や整備に反映されやすく、また管理者も整備に力を入れるのだろう。

少し大胆にいうなら、“人々が集う公園”は良い公園に成長(進化)していくという気がする。

公園に集客施設をもっと

こうした仮説が正しいとすれば、公園計画に際して、公園と調和した形でできるだけ人々が集まるよう集客装置として建物や屋外施設を適切に組み入れればよいことになる。

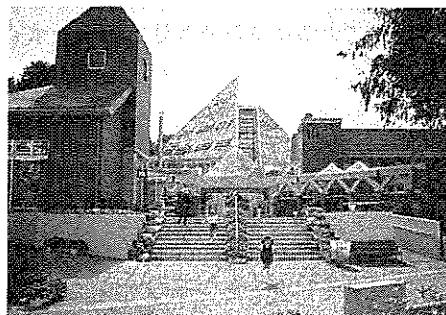
しかし、都市公園では、建物を建てることが制限されている。現行では建ペイ率は原則として公園面積の2%までであるが、昨年6月の改正でスポーツ施設や図書館などについては10%まで緩和された。とりあえずは、こうした緩和を生かすとともに、これからはお年寄りのコミュニティの場、あるいは中高生など若者が健全に集える施設など、人々がよく集まる施設の用地としてもっと自由に活用

してもよいのではないだろうか。

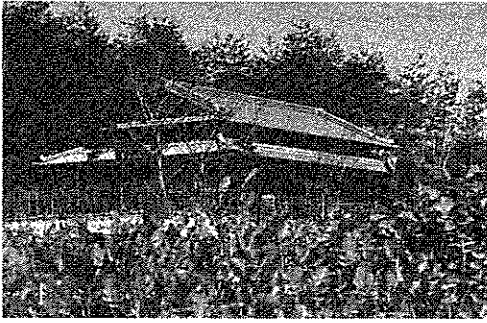
例えば、大阪府立「花の文化園」(河内長野市)は、花をたくさん植えたいいわゆる公園的な機能に、大温室・花に関する資料室・花の工房・レストランなどを加え、府民の文化的ニーズにも応えて、にぎわっている。「花の文化園」は都市公園ではないので制約は受けていないが、多分、建築面積が公園面積の2%をかなり超えていると思われる。しかし、園内を歩いてみて特に異和感はなく、かえっていろいろな特色ある建物があり花壇だけよりは楽しく、いわゆる“心の満足”を感じる。大阪府下にはこの他に「緑の文化園」(四條畷市)もあり、“公園+文化施設”という新しいタイプの施設整備が進んでいる。

日本人になじみやすい農村・野山型公園

「錦織公園」(大阪府管。富田林市)は、約30haに及ぶ里山一帯を段階的に整備中の公園だが、ここでは開園区域の中に“河内の里”が作られている。これは、河内地方のかつての農村風景を復元したもので、河内の農家風



花の文化園 大温室と花の資料館



錦織公園内の「河内の里」
(出典 パンフレット)
この地方の農家や水車が復元されている

の休憩所を核に、特産の綿などが植わっている畑や水車のある小川などが広がっている。まだ十分ではないが、地元では評判がよい。

また、開園区域の中にはアカ松やクヌギなどの比較的明るい雑木林(二次林)の里山が残され、散策などの場となっている。(ただ、日本では、林間とはまかく森や山を散策する習慣は少ないといわれている)

また、最近の公園では“芝生広場”に人気がある。これも昔風にいうなら“原っぱ”であろう。公園の芝生は以前は立ち入り禁止が多かったが、最近是人々のニーズに応じて開放されてきている。本当はタンポポなど草花の咲いている芝生広場ならもっといいのではないだろうか。

バラ園などのあるヨーロッパ風の公園もよいが、ここに挙げたような農村・里山・原っぱなども、日本の風土や習慣に根ざした、日本人のアメニティ感覚に合った公園における屋外型集客施設といえないだろうか。いずれも日本人が昔からなじんできたもので、特に



ウィーンの森を正装して散歩する年配者



珍しくはない。日欧共通の芝生広場以外は、都市公園の中に取り込んだところが、目新しいのであろう。なぜ目新しいのか。それは、多分、日本の都市公園づくりが、今ではあまりにも西歐的であったからではないだろうか。

実は先の都市公園内での建ペイ率の値(2%)についても根拠が今一つははっきりせず、どうもヨーロッパの公園のイメージに基づいて、森林など樹木を主体とした環境に純化したいという考えが根底にあるように思える。しかし、樹木中心だと植物の繁茂がおう勢な日本では、薄暗い公園・さびしい公園につながる可能性がある。

森林の中を散策する風習のあるヨーロッパ(ウィーンでは年配者が正装して森を散歩していた!それが今まではステータスになっていたらしい)とは異なった風土・習慣の日本での都市公園のあり方を、もう一度、みんなで考えてはどうだろうか。

住民一人当たりの都市公園面積が何㎡という面積的整備水準(現行は10㎡/人。昨年の改正で拡張)の追求だけではなく、我が国で人々が本当に望んでいる公園とはどんなものかという“質”の面を、問い直すべき時期にきているのではないだろうか。

(大阪事務所 しげもと さちひこ)

『わんぱく設計家・遊び場ワークショップ』体験記

— 65人の子どもたちが設計した遊び場が、今秋オープン —

松本 明

ワークショップで梅小路に遊び場をつくろう

蒸気機関車館でおなじみの京都梅小路では、旧国鉄貨物ヤード跡地を面積約12haの緑豊かな公園へと衣替えをすべく現在工事中です。この秋、オープニングに際して第11回全国都市緑化きょうとフェアが開催されます。

この会場の一角に、子どもたちによるワークショップ方式で遊び場をつくれなにかという話が浮かび上がったのは去年の夏のことです。フェア事務局の呼びかけで35人の多彩なボランティアが集まり、私もその一人として参加しました。市内各地の小学校から集まった65人の子どもたちと一緒に昨年の秋から4回のワークショップを重ね、この2月には、子どもたち自身による素敵な遊び場プランが6つできました。現在それに基づいて専門家による設計作業が進められています。

一緒に手を動かし、考えた

子どもたちの創造力や遊びのイメージをどうやって引き出し、形にしていくのか。なにしろ準備メンバー全員がワークショップ初体験、しかも小学生だけという他に例のない取り組みのため、進め方は暗中模索でした。今から考えて見ると、ともかく子どもたちの本当にしたい遊びの物語や場面を引き出し、膨らますことに主眼を置いたことが、成功のポ



完成した全体模型の発表会。他のチームがどんな遊び場を作ったか、みんなの眼差しは真剣そのもの

イントだったと思います。みずみずしいアイデアを目の当たりにすると、自然に次回の組み立てが見えてくるのでした。

子どもたちが主人公

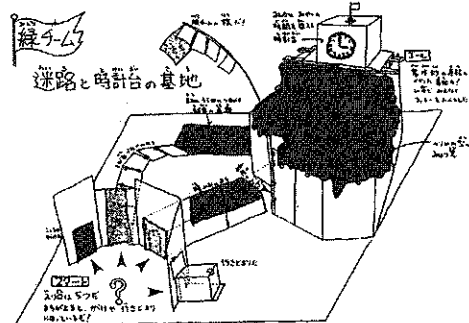
子どもたちの豊かで刺激的な感性や時に大変理詰めの計画論にハッとしたり納得したりしながら、当初の「形だけの参加に終わらせてはいけない」という肩に力が入った思いは、「一緒に計画することは楽しい」という確信に置き変わっていったと思います。参加型の計画手法がますます増えていくとすれば、プランナーにとっては大変楽しみな時代だともいえるかも知れません。

9月23日～11月20日のフェア期間中、ワークショップの詳しい顛末も展示されます。みなさん是非一度お立ち寄り下さい。（なお、便利な「パスポート」もあるそうです）。

（京都事務所 まつもと あきら）



模型づくりの風景 レストランと展望台のあるロボットタワー



ダンボールで基地づくり。隠れ家、迷路、時計台などのアイテムが浮かび上がる

'94 新人紹介

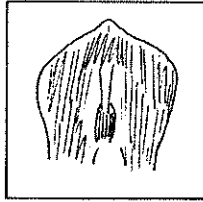
昨年は不思議な食べ物ナタ・デ・ココ、ジュラシック・パーク、Jリーグetc...色々話題になりました。情報をいち早くキャッチして、積極的にトライするのは20~30代が中心。今年は何が流行るやら....

アルパックに、今年も前途有望なニューフェイスが登場します。絵は自分の出身地やイメージをビジュアル化しました。お顔は皆さんのご想像におまかせします。どうぞよろしくお願いします。

【京都事務所】

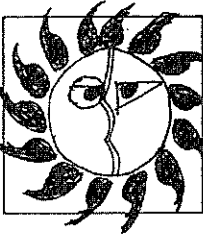
森川 宏剛 (第1計画部)

桜の名所である奈良県は吉野山の麓で生まれ育ちました。桜もさることながら柿の葉ずしも故郷のおすすめで、最近では、昔ながらの味を守っていた“やっこずし”がつぶれてしまい残念に思っています。時代劇をこよなく愛し、特に「大岡越前」が大好き。話し出すとどくなるので、私に時代劇の話をするのは禁物です。奈良といえば鹿をイメージしてしまいましたが、学生時代鹿の生態調査に参加し、その思いを表現しました。



石井 努 (第6計画部)

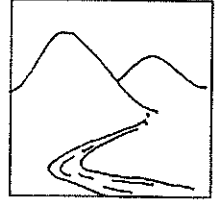
夏はむし暑く、冬は底冷えで寒い、日本のたいていの場所に行っても「いい気候だね」と言えてしまう、そんな京都が大好きな極度の方向おんちの私です。自分と自分以外の人とのお話で、人間の核の部分がぶつかるのが感じられれば、お互いに良くも悪くも役に立ちあっているなどと思います。これから仕事をしていく上でこんな瞬間があればいいな。



【大阪事務所】

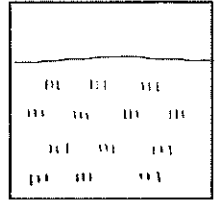
岡本 壮平 (第4計画部)

ふるさと自慢をするならつくしとしじみとがとれる加古川(兵庫県)の清流とその名物鹿^{かこ}児の餅。大学1、2年の間、ボランティアサークルに所属し手話の勉強をしたので、指文字ぐらいはできます。楽天的な性格と負けん気では、他人に負けません。



相楽 美穂 (第1計画部)

見渡す限りたんぼが広がる福島県で生まれ、美穂という名前はそこからきています。父の実家(同じく福島県)では米がとれるので、毎日外米を食べなくていいです。漫才をやるとすればしゃべるのが遅いので、ボケの方がいいです。近い将来、少しは貫禄がついて仕事が軌道にのってればいいな。



【名古屋事務所】

伊藤 克恵

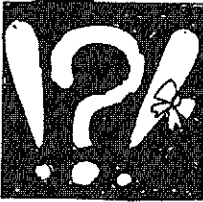
私のイメージは“しんのすけ”ではありませんが、私の子供はきっと“しんのすけ”のような子供でしょう。最近、腹がたったことは、大学の同窓会から住所の確認で「近々住所が変わる予定はありませんか」と聞かれたこと。今まで読んだ本で印象深かったのは、最近、上司に薦められて読んだ「マディソン郡の橋」で、泣いてしまいました。それを上司に話したところ笑われてしまったという私です。ハワイにも雨を降らせた雨女で5年後は、きっと20代に間違えられると喜んでいるでしょう。



【東京事務所】

阪井 暖子

世界各国の様々な料理が手軽に楽しめ、色々な人と会う可能性のある東京出身です。誰にも負けないことは、高校の時から大学一回生まで友人としていた交換日記がノート



250冊にもなったことと好奇心が強いこと。

5年後の私は楽しく生き生きと仕事をし、また、充実した日々を送って人生も楽しんでいるでしょう。

話題沸騰！ “今、サッカーが熱い”

稲岡 宏

1993年、この年は日本サッカー界にとって歴史に残る1年であった。5月には初のプロサッカーリーグである“Jリーグ”がスタートし、若者を中心に圧倒的な人気を誇った。また、10月に行われたワールドカップ'94アジア地区最終予選では、本大会出場まであと一歩のところまで涙をのんだが、深夜までTV中継にくぎづけになった方も多(？)いのではないかと思う。

Jリーグの試合はいつも満員の観客と熱狂的なサポーターであふれ、Jリーグ関連グッズが飛ぶように売れ、「Jリーグ」という言葉が流行語大賞をとるなど、サッカーが社会



淀川河川敷でのメンバー

現象となるほどの大ブームを巻き起こした。

このように華々しい面ばかりが強調されているが、ここでJリーグ設立の理念についてふれたいと思う。それはまず、住民と自治体、そしてチームが一体となってホームタウンを築き上げていくということである。住民はチームを「私たちのチーム」として応援し、自治体は競技場の整備やサッカーの振興等のバックアップを行う。地域に根ざしたスポーツクラブであるというのが理想とされている。

これは、今まで企業や学校が中心であったスポーツ社会とは大きく異なるものであり、欧米のスタイルをめざしたものであるといえる。欧米では、地域ごとにいつでも誰でもが参加し、楽しむことのできるクラブ組織があり、スポーツのためのインフラも整備されている。スポーツを通じて人々が交流し、生活を豊かにする「文化」として、スポーツが地域社会に根付いている。

Jリーグはまさに、地域に根ざしたスポーツを通じて日本のスポーツ文化を豊かにし、日本人の生活を豊かにするための拠点づくりをめざしているのだ。

勤めや学校の帰り、休日に、家族や友人、地域の人々とクラブで好きなスポーツを楽しむ。自分の住んでいる地域のチームを皆と一緒に応援する。こういった生活の中から地域の連帯感も生まれてくるのではないかと思う。現に、茨城県の鹿島町ではJリーグを通じて住民と自治体が一体となってチームを応援し、地域を盛り上げているといった例もある。

さて、世の中の流れにのったかのらないかは別として、最近アルパックの中でサッカーに参加する人が現れた(私もその一人)。現在、アルパックだけでなく、友人やそのまた友人といった人脈をたどって、チーム結成にむけて動いているところである。

今はまだ数人が集まって練習をしているだけであるが、仕事だけでなくスポーツを通じて交流することができ、仕事のストレス解消や体力づくりにも役立っている。いずれチームを結成して腕試しの試合をしてみたいと思っている。サッカーをしたい、はじめたいという人や、試合の相手になろうという人(チーム)があれば、ぜひ御一報下さい。一緒にサッカーをやしましょう。

(大阪事務所 いなおか ひろし)

うまいもの通信⑭ 謎の「ひげ茶」

福岡 雅子

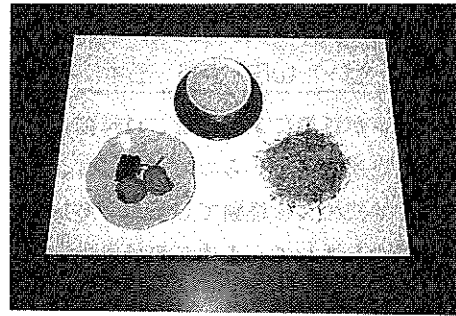
夏も近づく八十八夜……そろそろ茶摘みのシーズンです。

さて、今を去る2カ月前、花見に訪れた奈良県添上郡月ヶ瀬村は梅の花のシーズン突入で、道端では梅干しや草餅、農産物などの特産品を並べて多くの露店が開かれていました。

ところで、月ヶ瀬は梅林が有名で、主要な農産物はもちろん梅の実ですが、お茶の生産もかなり盛んです。露店でもいろいろな種類のお茶が売られており、手で揉んだ素朴なお茶の葉や、製茶の時に粉になった葉が格安の値段で並んでいました。

その中で、私の気を惹いたのが「ひげ茶」です。外見は、芝生や雑草の細かい葉にそっくりで、「芝生を刈って袋に詰めた」と言われれば信じてしまいそう。500mlの牛乳パックくらいの容積、重さは150gほどで100円という安さです。香りは普通のお茶と変わりません。

せっかく土産に買い求めたのですが、「芝生をお茶にして飲む」というイメージがつかまとうので、誰も飲みたがりません。芝生の匂いがすると言い出す人まで出てきました。



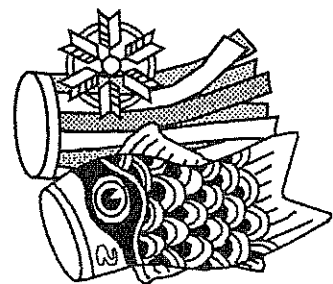
恐る恐る、普通のお茶のように湯を注いでみると、味は……普通のお茶とよく似ています。この謎の「ひげ茶」とは、いったい何でしょう。「ひげ茶」の謎解きです。

優秀な探偵が、やはり茶どころである隣村、南山城村の役場に出かけて尋ねたところ、製茶の時に出る「葉っぱのスジ」だとのことでした。昔は手揉みで製茶していたので、他の部分と一緒に入っていたのですが、機械で製茶をするようになり、機械の性能が良くなって、スジだけを分離できるようになったそうです。特に高級茶では必ずスジは取り除かれているそうです。

しかし、スジは邪魔なだけのものではありません。「ひげ茶」や茎の部分の「雁がね」は、1回目に湯を通した時が非常においしいのだそうです。2回目以降は出がらして味が無いので、湯通しをして1回目は捨てる高級茶の飲み方とは違うのです。

これで、安心して「ひげ茶」がいただけます。さあ、みんなでお茶にしましょう。

(大阪事務所 ふくおか まさこ)



リリアンさんの逝去を悼む

倉本 恒一 山田 克雄 石本 幸良

リリアンが京都に来たのは、11年前に今頃でした。東京の友人からの紹介もあり、アルパックでは初めての経験でしたが、海外技術者研修協会を通して、正式な海外研修生として来てもらうことになりました。

最初は、たどたどしい日本語でしたが、半年もしない内に、専門用語も覚えられ、仕事もすぐに理解され、なんでも吸収していこうとする熱心さに関心させられました。何よりも、謙虚で慎み深く、人に好かれるタイプでした。

そのころ、我が家でバーベキューパーティをよく開きましたが、リリアンと彼、ジュリオ氏も来られ、皆でわいわいやったことを思い出します。ブラジルに帰ってから、国の方は大変のようでしたが、きっと彼女のことから、何事も切り抜け、元気に仕事と家庭を両立させていると思っていました。

突然の悲報に何とも信じがたい気持ちです。慎んでご冥福をお祈り致します。

(大阪事務所 くらもと つねかず)

京都事務所で研修された満生(権藤)リリアンさんが、逝去された悲しい報せが届きました。

リリアンさんは、ブラジルから日本留学のため京都へ来られ、都市計画・まちづくりを学ぶかたわら、アルパックで2年間研修を受けられました。京都で結婚された満生ジュリオ氏と二人のお子様を残して、享年37歳で急逝されたことを知り、ただ哀惜の念に堪えません。リリアンさんは、ブラジルに帰国後、厳しい社会経済環境のなか、ジュリオさんと都市計画・まちづくりに取り組まれていたことをうかがっていました。その後、ジュリオ

さんが日系企業に勤められたこともあり、幸せなご家庭を築かれてたのではないかと拝察していました。

京都事務所では、リリアンさんのあと、田中(ナガミネ)カテリーナさん、当真テレーザさんの2名のブラジルからの留学生を研修で受け入れています。彼女たちは、それぞれ個性の強い、また、日本人が持っていない考えやおおらかな性格などをおし、私たちに大きな影響と違った生き方を教えてもらったような気がします。

リリアンさんの京都での温かい御厚情に対し心から感謝を捧げるとともに、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

(京都事務所 やまだ かつお)

リリアンさんの突然の悲報に接し、ほぼ同年代の私にとって、加えて私自身も入社してわずかの時にリリアンさんと2年間仕事をさせて頂いたこともあり、驚きの思いでいっぱいです。

「井の中の蛙」であまり外国の方と接することの少なかった私にとって、リリアンさんを通して外国の方の考え方や接し方について身近な職場の中で学ぶことができました。

近年、日本の様々な仕事の中で外国の方々が活躍され、一翼を担う時代となっていますが、ちょうど業務の中でも外国人に頼らざるを得ない産業構造について議論をしていたこともあり、改めてリリアンさんと共に過ごした2年のことが思い出されます。

リリアンさんが会社を辞められる時に頂いた手作りの名刺入れを取り出し、日本人以上に日本人らしさを私に教えてくれたリリアンさんの落ち着いた表情の笑顔が思い出されます。悼んでご冥福をお祈り申し上げます。

(京都事務所 いしもと ゆきよし)

新刊旧刊書評紹介

池波 正太郎 著 文春文庫

「鬼平犯科帳」1～23

紹介 中川 天晃

最近、巷では若い女性やOLの間で「歴史読み物」が流行っている。何故かは私の不勉強でよくは分からない。

ただ一つ言えることは、山本周五郎の「赤髭シリーズ」や藤沢周平の「江戸市井人情もの」それに、ここで紹介させていただく池波正太郎「鬼平シリーズ」の何れもが、平成の時代に読んでも、すんなりとその世界に浸れてしまう作品の「出来の良さ」にあることは間違いない。

「鬼平犯科帳」の主人公、長谷川平蔵^{のぶため}宣以は、徳川11代将軍の時代、1787年～約8年にわたり、江戸の凶悪犯罪を取り締まる「火付盗賊改方」略して「火盗改」^{おかしら}の長官として活躍した実在の人物である。

シリーズの面白さは、主人公のキャラクターによるところが大きい。

平蔵は「妾の子」で、17歳で父の亡き跡を継ぐまでは、飲む、打つ、買うの放蕩無類のワルガキで、悪の道の裏にまで精通する青春時代を過ごした。

その経験から生まれた「悪の道を知らぬものが、悪を取り締まれるか！」という平蔵の生きざまと魅力が、与力、同心達だけでなく、捕らえられた盗賊どもまでも密偵として働かせてしまうのである。

また、池波正太郎の描写力にも、読者を江戸時代にトリップさせてしまう強力な力がある。

当時の江戸深川あたりの地理や風景、江戸の食文化の描写、また、盗賊の裏の裏の世界までのリアリティ溢れるその表現は、著者の綿密な調査と地道な努力によるものであり、

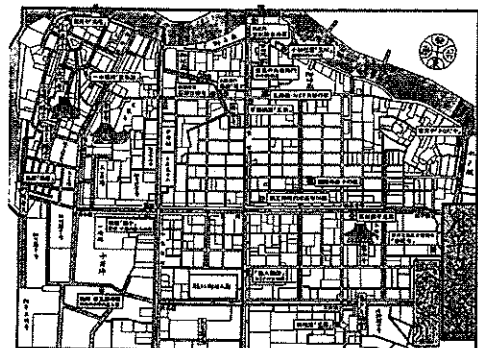
個人的には池波正太郎の凄さに感服しつつ「歴史読み物はまさしくこうあるべきだ」と思っている。

鬼平シリーズは23巻から

なるが、シリーズの主要登場人物データバンクや、用語解説マニュアル、18世紀市井事情Q&A等を記載したシリーズの事典ともいえる「鬼平犯科帳の世界」また、シリーズの食べ物についてのことを書いた「池波正太郎・鬼平料理帳」が同じ文庫から出版されており、これらを読んでいただければ、鬼平シリーズはもちろんのこと、今までの2倍は時代小説やTV時代劇を楽しめる。

読書は嗜好品であり、好き嫌いの個人差はあると思うが「時代劇が好きな人」「飲み食い好きな人」「人情話が好きな人」は、ぜひひご一読あれ。

(大阪事務所 なかがわ てんこう)



出典 「鬼平犯科帳の世界」

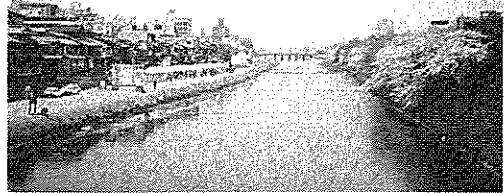
まちかど

洛中洛外図の再現か？

中村 孝子

桜の花が彩りをそえる鴨川に突如芝居小屋が出現！？場所は、京都の三条から四条間の鴨川河川敷。平安建都1200年のイベントの一つ“四条河原の賑わい”の開催場所である。

この芝居小屋は対岸の南座に対して、北座と銘打って設けられ、仮設の建物は南座とは大違い。でも、そのネーミングもさることながらそこがまた味わい深い。期間中、先斗町、祇園町などの京のきれいどころによる京舞や都太鼓・琴の生演奏などが繰り広げられ、私が行った時には、川上のぼるの腹話術をやっていた。



かつて、京の町では数々の町衆の文化や能、歌舞伎、舞踊などの芸能が花開いた。四条河原には芝居小屋が林立し、周辺の茶屋、旅籠、水茶屋が発展していったのにもその結びつきが大きい。

この北座の他には、京都府内・大津・奈良の名産品の出店や茶店などが並んでいて、土日は観光客、家族連れなどでごったがえしている。いつもと違った光景を前に、洛中洛外図の現代版を見たような気がした。きっと昔も同じ様に賑わっていたのだろう。

(大阪事務所 なかむら たかこ)



北座



アルパック (株)地域計画建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル6階)	TEL (075)221-5132(代) FAX (075)256-1764
京都事務所	〒540 大阪市中央区城見1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06)942-5732(代) FAX (06)941-7478
大阪事務所	〒460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル2階)	TEL (052)962-1224(代) FAX (052)962-1225
名古屋事務所	〒160 東京都新宿区新宿2-5-16 (露ビル401号)	TEL (03)3226-9130(代) FAX (03)3226-9560
東京事務所	〒810 福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092)731-7671(代) FAX (092)731-7673
㈱九州地域計画研究所	〒540 大阪市中央区城見1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06)965-2012(代) FAX (06)965-2014
㈱アルパックインターナショナル	〒604 京都市中京区東洞院通六角上ル 三文字町225 (朝陽ビル4階)	TEL (075)252-2231 FAX (075)252-4417
㈱都市居住文化研究所		